

## 天声人語

死と隣り合わせの戦場に句会があった。ところは南洋トラック島、強まる米軍の爆撃を避けながら、日本軍の将校や軍属の工員たちが句を批評しあつた。中心にいたのが、後に戦後俳壇主計中尉だった金子さんは上官に言われた。「みんな気持ちが暗くなるから、句会をやって慰めてやれ」。そこだけは陸軍も海軍もなく、階級の違いもない、自由闊達な精神があつたと、金子さんは著書で振り返っている▼ささやかな集いは長くは続かなかつた。食糧の欠乏で餓死者が続出し、俳句どころでなくなつた。敗戦を迎へ、捕虜生活を経て復員する船のなかで金子さんは詠んだ。  
 〔水脈の果て炎天の墓碑を置きて去る〕。航跡の向こうに残した仲間への鎮魂だつた▼自由を求める俳人だつた。しかし山頭火の放浪を理想とはしなかつた。冷遇されながらも日本銀行を勤め上げ、転勤する先々で俳句の仲間と交わつた。日々の生活を「泊」を好んで口にした。矛盾をはらんだ言葉は、精神の自由を保つための構えなのだろう▼季語や型にとらわれない作風であった。「『ハナミズキ』という季語と『国会前』という言葉を区別せず、自由に使えばいいのです」と語つていた。  
 〔曼珠沙華ども腹出し秩父の子〕の句があり〔原爆許すまじ蟹かつかつと瓦礫あゆむ〕の句がある▼金子さんが98年の生涯を終えた。爆撃も飢えもない平和を愛し、最後まで句を詠み続けた。

2018・2・22